



Title	平敷屋朝敏作『萬歳』と『狭衣物語』
Author(s)	萩野, 敦子
Citation	国語国文研究, 137, 23-37
Issue Date	2010-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93269
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_137-23-37.pdf



平敷屋朝敏作『萬歳』と『狭衣物語』

萩 野 敦 子

はじめに

平敷屋朝敏（一七〇〇—三四）は、短い生涯ながら琉球文学と和文学の双方で活躍した、近世琉球を代表する文人である。彼の事蹟の中でも特に和文で書かれた四編の物語『若草物語』『苔の下』『貧家記』『萬歳』の存在は沖縄の文学研究者や文学愛好家にはよく知られるところで、琉球・沖縄文学史を語るうえでは外せない一人なのだが、その知名度は必ずしも全国区とは言えないであろう。

四編の物語は「擬古文物語」と呼ばれ、ヤマトの王朝文学からの影響が色濃い。王朝文学特に物語文学の研究は現在、やや煮詰まり気味となっている作品論に代わり享受論が活況を呈しているが、享受の一樣相を示しているという意味で朝敏作の物語もまた、琉球・沖縄文学史において語られるだけでなく、ヤマトの王朝文学史の文脈においても語られる必要があると思われる。

四編のうち本稿では『萬歳』を取り上げる。当作品は、四百字詰原稿用紙に換算すれば三五枚程度の短編物語であるが、筋立てや発想、文章表現において王朝物語の影響を受けるところが多々あるほか、王朝和歌の表現もふんだんに取り入れており、王朝文学の享受の様相を最も確認しやすい作品だと言えるからである。

まずは当作品の梗概を示しておく。

領主層の家に生まれた白太郎金（しろたろうがね）は才色兼備の若者で特に楽才に長けていた（原文「ことに琴・笛は清原の俊蔭、狭衣の大将のいにしへにも劣らず、その妙を得給へり」）。おおよそ色めいたところはなかったが、ある日、萬歳と呼ばれる賤民芸能者から彼にふさわしい優れた女性として真鍋樽金（まなべのどろがね）の存在を知らされる。興味をそそられた白太郎金は彼女の住む地へ赴き、その姿を垣間見た瞬間、まことの恋に落ちる。真鍋樽金の屋敷に招かれ笛を奏して奇瑞を起こした白太郎金に彼女も心惹かれるが、すでに許婚との婚儀が迫っており、絶望した白太郎金は海に身

を投げる。そのことを夢に見た真鍋樽金は慌てて探索し、溺死した彼を発見する。真鍋樽金の嘆きが神意を動かし白太郎金は蘇生、神に保証された運命的な絆を周囲の人々も温かく受け入れ、二人はめでたく夫婦となった。

粗筋からは王朝物語というよりはむしろ御伽草子に傾いているようにも見えるが、当作品に王朝物語の享受を礎にして成り立つ公家物御伽草子の風情も漂っているのだとすれば、その点においても王朝文学の歴史の中に位置づく資格があるということになる。

・朝敏は最初に白太郎金を清原のとしかげや狭衣の大將に、あるいは間接的に光源氏に比定しているように、全体として王朝的世界を描いている。ただ末尾にきて神が出現して解決する発想はいかにも説話的である。

(池宮正治³)

・白太郎金については「ふえは清はらのとしかけ、さころもの大將のいにしへにもおとらず」と説明がなされる。また、彼が姫君の父・浜川殿の前で笛を吹き、その音色のあまりのすばらしさに自分の娘を与えたいとまで思わせるところは、やはり『津保物語』や『狭衣物語』の音楽にまつわるエピソードに影響を受けたと思われる。

(斉藤郁子⁴)

・『伊勢物語』『源氏物語』のほか、『津保物語』や『狭衣物語』の伝奇性が、色濃く影を落としている。

(関根賢司⁵)

・白太郎金は『うつほ物語』に登場する清原俊隆や『狭衣物語』に登場する狭衣中將に重ね合わせた人物として描かれる。

(玉那覇峻⁶)

このように先行研究による発言も重ねられてはいるが、梗概で引

用した原文「ことに琴・笛は清原の俊隆、狭衣の大將のいにしへにも劣らず……」が語るとおりの指摘にとどまったものが中心で、必ずしも具体的な表現分析がなされてきたわけではない。

本稿では、筋立てや発想および文章表現などトータルに撰取・影響の跡が著しい『狭衣物語』との関係に着目して、『萬歳』ひいては朝敏の物語世界を見通していく。『狭衣物語』じたい王朝物語・王朝和歌の粹を集めた作品であることから、近世琉球に生きた朝敏の、ヤマトの王朝文学史に対する立ち位置を測るには適切と言えよう。

なお『萬歳』の引用は沖縄県立博物館所蔵『平敷屋朝敏文集⁸』に拠り、便宜上私に校訂・釈文化したものをを用いる。『狭衣物語』については、非流布本系本文を代表させて日本古典文学大系本（以下大系）、および流布本系本文を代表させて日本古典全書本（以下全書）の双方を参観し、こちらも私に表記や句読点を改めつつ引用する。和歌の引用は新編国歌大観CD-ROM版に拠るが、『万葉集』に限り鶴久・森山隆編『萬葉集』（おうふう）に拠る。

第一節 主人公造型・音楽奇瑞にかかわる撰取・影響

右に紹介した諸論考の指摘するところと重なるが、まずは『萬歳』の起筆部分を最初の事例として確認しておきたい。

〔事例A〕主人公の紹介

中ごろ、具志頭^{ぐしづめ}の太守の御弟、安里^{あさ}の按司^{あき}の三子^{みっし}に白太郎金とて、十六ばかりなる、いまそがりけり。①御手きよらに、②作文いみ

じく、③ことに琴・笛は清原の俊蔭、狭衣の大將のいにしへにも劣らず、その妙を得給へり。④御かたちは、玉を刻めるやうにて光り輝けば、若き女のため惑はぬなし。されど、⑤なよびかに色めかしきかたは好ましくぬ御本性にて、重々しう⑥まめだちてのみおはするを、⑦口惜しがる女多かり。

『うつほ物語』の俊蔭と狭衣の名が実際に掲げられ、主人公白太郎金の人物設定に寄与していることが明示される。十六歳という設定は遣唐使となった俊蔭の物語が実質的に動き出す年齢に重なり、枠組みは俊蔭に拠るところも大だが、具体的な人物造型については『狭衣物語』からの影響がきわめて濃いと言えよう。丸番号を付した傍線により対比させてみる。

- ・⑤世の男のやうにおしなべて乱りがはしくあはあはしき御心ばへぞなかりける。：（中略）：人よりはものすさまじげに、⑦口惜しき方に思ひ聞えさせたる人もあるべし。（大系・三三頁）
- ・⑤いかなるにか、御身の程よりはいたく鎮まりて、：（中略）：少しものすさまじう心やましき御気色なるを、⑦口惜しく、心もとなきものに思ひ聞ゆる人々もあるべし。：（中略）：⑥さこそまめだち給へど、（全書・上一九〇頁）
- ・④光り輝き給ふ御かたちをばさるものにて、心ばへ、②まことしき御才などは、高麗・唐土にも類なきさまにぞ思ひ聞えたためる。①御手などは：（中略）：「時世に随ふにや、なつかしく今めかしく見所ある筋は、ことのほかに勝り給へり」と定められ給ふめり。また、③琴・笛の音につけても雲居を響かし、この

世の外まで澄み昇りて、天地を動かし、人の心も驚かし給ふべければ、（大系・三五頁）

- ・④光り輝き給ふ御容貌をばさるものにて、御心ばへ、②まことしき御才などは、唐土にや類あらむ、この世には、今も昔も類無くぞものし給ひける。①手など書き給ふさまも、：（中略）：「書き増し給へり」とぞ沙汰せられ給ふめる。また、③琴・笛の音につけても雲居を響かし、この世の外まで澄み昇り、天地をも動かし給ひつべきを、（全書・上一九一頁）

流布本・非流布本いずれにおいても『狭衣物語』では多くの言葉を尽くして描かれる主人公の人となり、あたかもダイジェストのように端的に表現しているのが『萬歳』であると言えよう。白太郎金の女性に対するストイックさは、このあと「いみじき聖、法師だに、この道にはあやまてりし例多かるを」「変化の人にや」とも語られるが、これらについても『狭衣物語』の「仏の現れさせ給へるにや」（大系・三四頁、全書には対応する記述なし）、「法師などだにも、かかることは難きにや」（大系・一三六頁）／「法師などだにかかる心は難きにや」（全書・上一九七頁）、「げにいかならんあやまちもし給ひぬべきに、：（中略）：げに世の人の聞ゆるん変化の物にや」（大系・一三六頁）／「げにいかならむあやまちをだにし給ふべきに、：（中略）：げに世の人の聞ゆるむやうに、変化の物にや」（全書・上一九七頁）などとの類同性がうかがえる。

〔事例B〕主人公に対する父母の溺愛

「親たちの片時ありくをだにおぼつかなくし給ふ、ましていかに求

め騒ぎ給はん」と、これも心のままならで、うち嘆きつつおはするに、

このように、父母が動揺するであろうことを承知しつつも白太郎金は意を決して出奔するのだが、その後も「あはれ、いかに求め騒ぎ給ふらむ」と父母を思いやらずにはいられない。このような主人公と父母との関係性については『狭衣物語』でも、

・雨風の荒きにも、月の光のさやかなるにも、当たり給ふをば、忌々しくゆゆしうぞ思ひ聞えさせ給へる。
(大系・三三頁)

・雨風の荒きにも月日の光のさやかなるにも当たり給ふをば、いたはしくゆゆしきものに思ひ聞え給ひつつ、

(全書・上一八九頁)
と紹介され、実際に狭衣が粉河に出向いた折には、父親は、

・出でさせ給ふに、その後、殿もすべて物も聞こしめさず。夜もつゆばかりも大殿籠らでなんおぼつかながり、明かせ給ひける。
(大系・二一九頁)

・出でさせ給ひにし後、殿、物などすべて御覧し入れず、夜など、つゆばかりも御殿籠らでおぼつかながり明かせ給ひける。

(全書・下九頁)
という有様であったという。また「片時」の語は、『狭衣物語』においては大系で十一例、全書で十二例を数えるが、共通する十一例はいずれも肉親の情に絡んでおり、目に付く語といえる。たとえば、狭衣が出家のために邸を出たのではないかと気づいた両親のさまは「二所して思し感ふさま、片時だにいみじげなり」(大系・三四二頁)／

「二所して思し感ふさま、片時だにいみじげなる」(全書・下一四九頁)と描写され、その後、彼の無事を知った父親は「一日片時、見きこえぬほど、恋しうかなしきものに思ひ聞えたるを」(大系・三四二頁)／「一日片時も見聞えぬほどは、恋しく悲しきものに思ひ聞えたるを」(全書・下一五〇頁)と狭衣に訴えている。萬歳の父母の思いにまつわる「片時」表現も、こういった『狭衣物語』の事例に支えられて成立しているのではなからうか。

〔事例C〕主人公の奏楽による奇瑞とその1)

懐なるを取り出でて、③音の限り吹き澄まし給ふに、②この世の物の音ともおぼえず、③あやしうおもしろく心寒くて、④頭の毛なども立ち上がる心地するに、梁の塵ひるがえり落ち、池の魚踊り出でて、中島の松の枝などよりはためきありく、めづらしともなかなかなり。

音楽奇瑞の具体的場面は『うつほ物語』でも「俊蔭」「吹上・上」「楼上下」各巻に見られ、それらからの影響も想像されるが、こと右の事例においては、『狭衣物語』の巻一序盤の笛の演奏による天稚御子降下の場面、および巻三終盤の琴の演奏による神殿共鳴の場面からの影響・摂取のほうが強いようである。巻一における狭衣の笛の演奏場面には、次のようにある。

・聴く限りの人々も、さらに②この世の物の音とも聞えぬに、
(全書・上一〇二頁、大系には対応する記述なし)
・宵過ぐるままに、笛の音いとど澄み昇りて、空の果てまでのこ

とごと③あやしくすずろ寒くもの悲しげに、稻妻のたびたびして雲のたたずまひ例ならぬを、…(中略)…①音の限り吹き給ふは、げに月の都の人もいかでか聞き驚かざらん。

(大系・四五頁)

宵過ぐるまに、雲のはたまで響き昇る心地するに、稻妻たびたびして雲のたたずまひ例ならぬを、…(中略)…①音の限り吹き給へるは、げに月の都の人もいかでかは驚かざらむとおほゆるに、

(全書・上二〇三頁)

また、白太郎金の笛の妙なるしらべを聴いた人々の感動が、④「頭の毛なども立ち上がる心地」とされているのは印象的な表現であるが、これに対しては、『狭衣物語』巻三の弾琴場面、

・神殿の内三たびばかりいと高う鳴りて、言ひ知らずかうばしき句ひ世の常の限りにはあらず、さとくゆり出でたるに、④まこと頭の髪逆さまになる心地して物恐ろしきこと限りなし。

(全書・下一四三頁)

とあるのが思い起こされる。『狭衣物語』の場合には、異変が生じたことに対する人々のゆゆしき思い(言うまでもなく現代の「恐怖」とはニュアンスが異なる、対象人物の神性を意識した感情である)を示す「頭の髪」表現なのではあるが、『萬歳』においても人々が、笛の音に対する感動を通り越してゆゆしき思いを感じているものと解釈すれば、両者には類同性があるものと見なすことができよう。

なお、『萬歳』が『狭衣物語』の弾琴場面を意識している点については、次の事例を見ることで、より明らかにになる。物語の最終盤、大団円に花を添えるかのように、白太郎金が再び奇瑞を引き起こす

場面である。

〔事例D〕主人公の奏楽による奇瑞とその2)

事ども果ててしづまるほど、白太郎金、琴を弾き給ふに、言ふよしなうあはれにおもしろう響きて、この山の鳥けだものの耳をたてて聞くらんかし、とおほゆるほどに、神殿に、いともけだかき御声にて、面白やと三度のたまへば、人々御手を合はせて、随喜の涙流し給ふ。何某の大将、賀茂の御社とかやにて琵琶を弾き給ひしに、神殿の内に物の音しけるとかやは、日の本の昔ごとだに聞きしを、目のあたりにかくありがたき御ことの侍るよ、とみづからも涙ぐみておはす。

このように白太郎金は物語の中で笛と琴の琴とで二度の奇瑞を起こし、しかも二度目の琴の折には「神殿」を感じさせているのであって、狭衣の音楽奇瑞をそっくりなぞっていることがわかる。語り手も、「日の本」の「何某の大将」が起こした奇瑞にも同様のことがありましたと、この話柄にソースがあることを明らかにするかのよう

に告げ、もはや語りのテクニクたる引用表現として物語の文章に溶解させることさえしていない。『萬歳』において、このような物語の文章が登場するのは、ここだけである。

実は、この事例Dに見られる語り——すなわち、先行物語が描いた話柄・話題を、今まさに語っている物語世界の「現在」に先んじて起こった歴史的事実であるかのように語る手法——そのものが、『狭衣物語』にヒントを得たものと見られるのである。巻四、狭衣が

訪れていた斎院に若公達が集つて蹴鞠に興じ、狭衣自身は参加せず
に眺めているという場面である。やや長いので、ほぼ同内容の引用
を繰り返すことはせず、全書のみを引いておく。

・大將殿なども興じ給ひて、ややもすれば下り立ちぬべき心地こ
そすれ。なぞて今しばしは若くてあらざりけむとのたまへば、
御簾の内なる人々、「まめ人の大將はおはせずやは侍りける。さ
らばしも、花の散るも惜しからじかし」など、口々いと立てた
てまつらまほしげなるけはひどもなり。…〔中略〕…高欄に押し
かかり給へるまみ、気色、御声などは、かの「桜は避きて」と
て花の下にやすらひ給へりし御さまを、その折はをかしと見し
かど、この御有様、類なげにぞ、何事の折にも見ゆる。

（全書・下一七〇頁）

ここで『狭衣物語』に意識されているのは『源氏物語』若菜上巻
に描かれた六条院での蹴鞠の場面であり、「まめ人の大將」夕霧と
もに蹴鞠に参加した柏木が「桜は避きてこそ」と口にした様子を、
語り手は事実として「見た」とするのである。琉球を物語の舞台と
する『萬歳』の場合はヤマトで起こった『狭衣物語』の出来事と「見
た」と言うわけにはいかないので、「とかや」すなわち伝聞したもの
として紹介するのだが、物語の「現在」に先行する事実として語っ
ている点では、同工のものと見えよう。

こうして見てくると、『萬歳』の『狭衣物語』摂取とは、単に超常
的な主人公を造型するうえでのモデルにしたとか、彼をめぐる超常
的な事件を描くうえでのヒントにしたとかいうような単純ものでは
なさそうである。ヤマトの王朝文字を代表する物語を、朝敏なり

に消化しようとした跡がうかがえるのであるが、それは恐らく、次
節に見る事例により、さらに明らかになると思われる。

第二節 物語展開にかかわる摂取・影響

真鍋樽金に許婚がいることにより未来がないかのように見えた白
太郎金の恋は、彼が海への投身を決意することによつて、大きく転
回することになる。そこらがいよいよこの恋物語の山場となるわ
けだが、ここに影響を与えているのが、『狭衣物語』の飛鳥井女君譚
である。

〔事例E〕海への投身を決意した白太郎金の心内

…〔前略〕…など思すにも、①面影ぞ浮かびぬる。②さて、③ただ
今は何事をし給ふらん。かくとも知らで、④寝やし給ふらん。夢
にや見給ふ。まだ起きてやおはすらん」など、⑤さまたま思さる
るもかひなければ、急ぎ入らんと思して、

これは朝敏にとつて、『狭衣物語』の摂取なしには描き得なかつた
文章だつたはずである。次に引くのは『狭衣物語』巻一の最終局面、
かどわかされた末に海に身を投げようと思ひ至つた飛鳥井女君が恋
しい狭衣の歌が書き付けられた扇を手に、彼を思う場面である。

・①面影さへふと思ひ出でられて、この世には見たてまつるまじ
きぞかし。②ただ今かくなりゆくとも知り給はで、いづくにいか
さまにてかおはすらん。③寝やし給ひぬらん。起きやし給ひ

ぬらん。寢覚めには思し出づらんかし」など、④さまざまいみじき心惑ひにも、

(大系・二一四頁)

・さし向かひたる①面影さへふと思ひ出でらるるに、「この世にまた見たてまつるまじきぞかし。②ただ今かくなりぬるとも知り給はで、いづこにいかにしておはすらむ。③寝やし給ひぬらむ。さりとも寢覚めには思し出づらむかし」などよりほかは、またなき心惑ひなり。

(全書・上二七八頁)

「面影」が契機となり、恋人が今この瞬間どうしているだろうかと思ひめぐらす②③部分の表現などは、偶然の一致であるとはとても考えられまい。男女の立場は入れ替わっているものの、ここに至って、『萬歳』が作品の骨格において『狭衣物語』の影響を他のどの王朝物語よりも色濃く受けていることが知られるのである。

ここでは『狭衣物語』の、特に飛鳥井女君譚からの影響を確認しているわけだが、白太郎金の投身をめぐっては他にも飛鳥井女君譚からの摂取のさまが見受けられる。端的なのは次の事例である。

〔事例F〕白太郎金が「底の水屑」と書き付けた扇

海のあるところに、

うきめのみ朝夕かく苦しさに千尋の底の水屑とぞなる

とみそかに書き付けて、包みてかたく封じて渡して、例よりもなつかしう語らひおはす。…(中略)…姫君は例の目覚めておはするに、乳母帰り来て、ありつる扇を奉りければ、みそかに紙燭召して御覧するに、あはれなること尽きせず。「底の水屑」とのたまへるを、いかなることぞとおぼつかう思し明かす。

かねてより真鍋樽金の乳母は白太郎金に肩入れしており、二人の恋を取り持とうとしていた。死を決意した白太郎金は、この乳母に託しておけばいずれ真鍋樽金の目に触れるであろうことを確信したうえで、乳母に辞世の詠を書き付けた扇を手渡す。

『狭衣物語』では、飛鳥井女君は狭衣との仲を裂かれ、狭衣の腹心である道成に連れられて西国行きの船に乗せられる。その船上、あるじの恋人とはつゆ知らぬ道成から見せられた狭衣の扇に、女君は辞世の詠「早起瀬の底の水屑となりきに」と扇の風よ吹き込む……(大系・一一五頁)を書き付け、いよいよその時と海を覗き込む……というのが、『狭衣物語』の巻一の末尾である。実はここでの投身は未遂に終わっているのだが、彼女が海に身を投げたものと信じた道成は、やがて上京した折に、狭衣に扇の件を話す(巻二)。女君の形見というべきこの扇を、狭衣は半ば強引に道成から奪って女君への迫害に浸り、「唐泊底の水屑となりにしを瀬々の岩間も尋ねてしかな」(同・一一八頁)と独詠する。以降、「かの底の水屑をだにあらましかば」(同・一八五頁)、「かの底の水屑も思し出でられて」(同・二〇八頁)、「さらば、この底の水屑のゆかりなりけり」(同・二二二頁)と、狭衣のなかで「底の水屑」は女君その人を表す鍵語となっていく。

ところで本稿では、本文系統に関わりなく『狭衣物語』の影響を『萬歳』が受けていることを証するため、基本的に二種類のテキストを並記しているのだが、右に示してきた「底の水屑」の例については、やや厄介な問題が生ずる。全書すなわち流布本系本文では、飛鳥井

女君の辞世は「早き瀬の底の藻屑となりきと扇の風よ吹きも伝へよ」(全書・上二七六頁)となっており、その後も「底の藻屑まで尋ねまほしき御心」(同・上三〇四頁)、「この底の藻屑だにあらましければ」(同・上三五三頁)、「さらば、この底の藻屑のゆかりなりけり」(同・上三八三頁)と「底の藻屑」表現が続いていく。が、その一方で、女君の船上詠を承けた狭衣の独詠は「唐泊底の水屑と流れしを瀬々の岩波尋ねてしがな」(同・上三四九頁)となっており、「かの底の水屑も思し出でられて」(同・上三七八頁)、「人は底の水屑とのみこそは聞きなし給はめ」(同・下二八五頁)と「底の水屑」もまた併用されていくのである。この「底の水屑」と「底の藻屑」の混乱混用は、当該本だけの問題ではなく「狭衣物語」の複雑な伝来過程に関わる問題でもあるが、ともあれ現在確認できる諸本において「底の水屑」表現が必ず登場することも確かなので、朝敏がいずれの本で「狭衣物語」を読んだにせよ、当物語から「底の水屑」表現を字び取ったことは揺るがないというこのみ、ここでは確認しておきたい。

事例Fほど端的ではないけれども、これに続く場面においても、飛鳥井女君譚との関連が指摘できる。

〔事例G〕真鍋極金、白太郎金の投身を夢に見て、目覚める

暁がた、少しまどろむ夢に、高き岩ほに立ち給へるを、何事やらん、いささかうち誦し給ひて、やがて海にうち入り給ふと見て、うち覚めぬ。

ここもまた男女の立場は逆になるが、『狭衣物語』でも、狭衣が飛鳥井女君の姿を夢に見る場面が二度描かれる。一度目は、女君の周囲が着々と西国行きに動いている緊迫した状況のなか、「少しうちまどろみ給へる夢に」(大系・九五頁)／「少しまどろみ給へる夢に」(全書・上二五七頁)、懷妊した姿の女君が現れて不吉な歌を詠むのを聞いた狭衣が、物忌みだから警戒せよとの父親の声に「ふと驚かれて」(大系・九六頁)／「ふと覚めて」(全書・上二五七頁)、胸騒ぎを禁じ得ない、という場面。そして二度目は、女君の法要を終えた狭衣の夢に女君が現れ、歌を詠みかけるといふ場面である。

・暁にもなりぬらんとおぼゆるまでに、やがて端にうち休みて、まどろみ給へるに、ただありしさまにて、傍らに居て、…(中略) …と言ふさまのらうたげさも珍しくて、「物言はん」と思すに、ふと目覚めて、見上げ給へれば、(大系・二九八頁)

・暁近くなりぬらむとおぼゆるまで居明かし給ひて、あまり苦しければ、やがて端つ方にうちまどろみ給へるに、ただありしさまにて、傍らに居て、…(中略) …と言ふさまのらうたげさも珍しうて、「物言はむ」と思ふほどに、ふと覚めて見上げたれば、(全書・下二〇二頁)

まどろみのうちに見た夢に恋人が現れ、すぐに目覚めるといふのは、たとえば『浜松中納言物語』でも重要な話柄となっているように、王朝物語において何も『狭衣物語』の専売特許というわけではない。しかしながら、先の事例E・Fで確認した『萬歳』と飛鳥井女君譚との関係の深さを念頭に置いて読めば、やはり参考にしてよい事例であると言える。

以上のように『萬歳』は、主人公の造型と投身入水物語への展開において『狭衣物語』から少なからず影響を受けていた。とりわけ後者では、飛鳥井女君譚との関係が顕著に見られるわけだが、この点については、ヤマトにおける『狭衣物語』享受史において飛鳥井女君譚が、物語の推進という役割を分け合っているはずの源氏宮譚や女二宮譚に比して圧倒的な存在感を放っていることと、パラレルな現象であるように思われる。琉球における朝敏の『狭衣物語』享受のありようは、それだけが特別なありようとして際立っているというものではないのである。

第三節 文章表現にかかわる摂取・影響

『萬歳』に限らず他の擬古文物語においても朝敏は、「擬」と呼ぶにふさわしい相当にこなれた和文を披露している。その散文には説話くささや中世・近世小説くささもないわけではないが、朝敏自身は王朝物語の流れに位置づける気概を持って、文章をものしているように思われる。美文と謳われる『狭衣物語』の文章から学ぶ意識も当然強かつたであろう。本節では、それがうかがえる箇所を取り上げてみる。

〔事例H〕「いもがりゆけば」

袂吹く①潮風冷ややかに、波の音ものさびて、②一群千鳥鳴き渡るも、③いもがりゆけばと詠みし人は、頼みもありて④あくがれけんかし。行く先、いさや白波の寄りもつかずは、いかがしてま

し」など思ひておはするほどに、里に着かせたまひにけり。

萬歳から教えられた真鍋樽金に、まだ見ぬ人であるにもかかわらず心惹かれてやまない白太郎金は、故郷具志頭を後にして彼女が住む勝連に向かう。先行注釈では『万葉集』の「妹許行名」(巻一・〇・二二五七)や「伊母我理登倍婆」(巻一・四・三三五六)といった用例を紹介しているが、ここは言うまでもなく、紀貫之詠「おもひかね③いもがり行けば冬のよ①川風さむむ②千鳥鳴くなり」(『貫之集』三三九)を思い起こすべきであろう。風の冷たさ、千鳥の声に喚起されたこの典型的な引歌表現は、たとえ冬の寒空のなかであろうとも待つていてくれる恋人のぬくもりを目指して進んで行くことのできる男の思いをうたう本歌の内容を対置することで、彼女に逢えるつてもあてもあるわけではない白太郎金の不安な思いをみごとに浮き彫りにしていると言える。当歌は『拾遺和歌集』巻四・冬・二二四に入集しているほか、『古今和歌六帖』『新撰髓脳』『拾遺和歌抄』『金玉和歌集』『和漢朗詠集』といった一連のアンソロジー、および『俊頼髓脳』『奥義抄』『古来風体抄』『定家十体』といった歌学書・歌論書に軒並み採歌されており、和歌人でもあった朝敏の知識には当然入っていたであろう。

ただ、ここで注意しておきたいのは、この引歌による文章修辭が、やはり『狭衣物語』に学んだうえに成立しているのではないかと思われる点である。

・宵過ぎぬれば、有明さやかに澄み昇りて、雪すこし降りたる空の気色の冴えわたるは、言ひ知らず心細げなるに、②小夜

千鳥さへ妻恋ひわたるに、③貫之が「いもがりゆけば」と詠みけん、もうらやましようながめやり給ふに、御心も④あくがれまきりて、

(大系・一六八頁)

宵過ぎて出づる影さやかに澄みわたるに、雪すこし降りたる空の気色の冴えわたるも、言ひ知らず心細げなるに、②小夜千鳥さへ妻呼びわたるに、③貫之が「いもがりゆけば」と詠みけむ、もうらやましくながめわび給ふに、心も④あくがれ惑ひて、

(全書・上三三四頁)

右は卷二後半、恋しい女二宮の出家を知り、彼女が自分をきっぱり拒絶したことを思い知らされた狭衣が、彼女の住む宮に訪れようとする場面である。待つていてくれる恋人がいる貫之を羨ましいとする当該箇所は、本歌の状況と主人公の現在置かれていた状況との落差が効果的に演出されたことな引歌表現となっている。事例Hにおける朝敏の引歌表現は、貫之の本歌から直接発想されたのではなく、『狭衣物語』を経由してなされたものと見るのが妥当であろう。⁽¹⁵⁾意味合いは異なるものの「あくがれ」の語が共有されていることも傍証となろうか。

ちなみに『狭衣物語』の当該箇所では「雪」が降っているのだが、『萬歳』では事例Hとして引用した箇所の直前に、

渡口のわたりおはするほど、雨降り来ぬ。立ちとまるべき陰もなければ、「さのわたりの雪」のほど、うち誦しつつおはす。

とあり、南国琉球の地ゆえ「雪」こそ降らないものの「雨」を降らせ、それが白太郎金にとってはヤマトの古歌に詠まれた「雪」を思わせるものだったという描き方がされている。冬の寒い夜、恋しい

人のもとに向かう男のわびしさや不安を表現するのに、降る雪あるいは降る雨は、恰好の景として機能しよう。これ以外にも、『狭衣物語』の当該箇所の直後に、やはり狭衣の心を動かす景として出てくる「鶯鷺」が、『萬歳』でも当該箇所の少し前に出てきているなど、文章修辭における朝敏の『狭衣物語』摂取は、なかなか凝ったものがある。

もう一例、見ておきたい。

〔事例Ⅰ〕「月影の濡る顔なる袂」

男君は、「かうまで聞こゆることを、いかなる石木なりとも、かうはしたなくやはもてなすべき」と、ねたうも口惜しうもさまざま思し続けるに、落つとも知らぬ御涙袖に余りて、軒漏る月の映れるを見給ひて、

月影の濡る顔なる袂にも人のつらさの見えて物憂き寝られ給はぬまま、起き出でて、浜のわたりながめありき給ふ。

勝連に到着し、真鍋樽金を垣間見てまことの恋に落ちた白太郎金は、悪意になった彼女の乳母を通して恋文を送るが、当然のことながら警戒されてしまう。白太郎金の片恋の煩悶を綴る場面である。

彼の独詠「月影の…」に対しては、仲原注が「月見れば千々に物こそ悲しけれというけれども、こうして、月の光に濡れた袂の涙を見ると、思うようにゆかない、人の世のつらさが、しみ／＼感じられて、何と物憂い夜であることよ」との解釈を提示し、大江千里の「月見ればぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」

『古今和歌集』巻四・秋上・一九三、『是貞親王家歌合』六二、『古今六帖』三〇（一など）の本歌取りと解しているものと判断できるが、本歌を指摘するとすれば、より直接的に影響を与えているのは『狭衣物語』の次の場面における狭衣詠であろう。

・（狭衣ハ源氏宮ヲ）いみじう恋しうおぼえさせ給ふに、さやかなりつる月影も、やがてかき曇る、御覽せさせ給ひて、いとど心も空になりぬ。

恋ひて泣く涙にくもる月影は宿る袖もや濡るる顔なる

（大系・四三三頁）

・いみじう恋しくおぼえさせ給ふに、さやかなる月影も、やがてかき曇る心地せさせ給ひて、いとど心も空になりぬ。

恋ひて泣く涙にくもる月影は宿る袖もや濡るる顔なる

（全書・下二五五頁）

巻四、狭衣が「濡るる顔」をした月の光に自らの泣き顔を重ねて、恋うてやまない源氏宮への思慕の情を歌に託す場面である。「濡るる顔」という歌語そのものは、伊勢「あひにあひて物思ふころのわが袖にやどる月さへぬるるかほなる」（『古今和歌集』巻一五・恋五・七五六、『後撰和歌集』巻一八・雑四・一二七〇など。『伊勢集』二〇八では第二句「物おもふときの」を先蹤とし、当該歌もこの伊勢歌の本歌取りと見られないこともないが、「月」ならぬ「月影」の語の使用から、『萬歳』においては『狭衣物語』の狭衣詠を本歌とすることで当該歌が詠まれ得たものと考えたい。なお、和歌史において「月（月影）―濡るる顔」表現は、新編国歌大観を参照する限り伊勢以降しばらく詠まれておらず、平安時代末期以降に俄然用例数を増

やしたようである。

事例Ⅰは「濡るる顔」詠の直前の地の文においても、源濟「ゆくさをしらぬ涙の悲しきはただめのまへにおつるなりけり」（『後撰和歌集』巻一九・離別・一三三三）を意識したかとおぼしい「落つとも知らぬ御涙、藤原定家」むめの花にほひをうつす袖の上うへに檐もる月の影ぞあらそふ」（『新古今和歌集』巻一・春上・四四、『正治初度百首』一三〇九、『拾遺愚草』九〇六）を引いたかとおぼしい「軒漏る月の映れる」といった、和歌的な表現を散りばめている。また、本稿では専ら『狭衣物語』との関係に的を絞っているため詳述するいとまはないが、文章修辭においては少なからず『源氏物語』を参考にしたと推し測れるところも見られる。朝敏の擬古文物語の文章は概して流麗であると評せるのだが、このような美文を綴ろうとすることじたいに彼の、『源氏物語』や『狭衣物語』のような王朝物語を「擬」こうとする意欲を感じ取ることができよう。

おわりに

はじめに述べたように、『萬歳』に『狭衣物語』が影響を及ぼしているという指摘したいは夙にされていたわけだが、それらは主人公の超越ぶりや音楽奇瑞の要素、すなわち専ら物語の伝奇性をめぐる発言にとどまってきた観がある。本稿では、すでに指摘されている「主人公造型・音楽奇瑞」にかかわる摂取・影響を具体的に確認することから出発し、「物語展開」「文章表現」にかかわる摂取・影響へと視野を広げることにより、先行論文や先行注釈が踏み込んでこな

かった『萬歳』の物語世界、朝敏が描こうとした物語世界の内実に迫ることを目指した。『狭衣物語』からの摂取・影響と見られる箇所は本稿で取り上げたものがすべてではなく、指摘したいところは他にもあるが、それらを逐一紹介することは注釈という形式に委ねるべきであろう⁽¹⁸⁾。

と言いながら本稿が注釈的な言及を多くしてきたのは、ひとえに朝敏の物語がいかに王朝文学の「子」たり得ているかを明らかにするためである。『萬歳』という物語で最も印象的な出来事は、何といっても投身により溺死した白太郎金の神意による蘇生であり、これはきわめて御伽草子的な話柄である。実際、『萬歳』の物語展開に多大な影響を及ぼした『狭衣物語』の飛鳥井女君譚は室町時代に御伽草子化されているが、そこでも女君は、墓から掘り返された亡骸を抱く狭衣と遺児の嘆きに対する神仏の感応により蘇生していた。両作品に共通する蘇生後の大団円もまた、いかにも御伽草子的作品であると言えよう。が、それでもやはり、朝敏が『萬歳』で描き出した物語世界は總体的に見て、御伽草子よりもむしろ王朝物語、ひいては和歌を礎とする王朝文学の末裔であつたと見なすべきである。ちなみに朝敏作とされる『手水の縁』は、多くが王府への忠義や親子の孝養・情愛を主題とする琉球の古典組踊にあつて唯一の恋愛物である。かようなところにも「物語」にこだわった朝敏文学の特性が反映しているよう。一八世紀初頭の琉球国に生きた平敷屋朝敏の名を、ヤマト発の王朝文学史の一端に刻むことを提案したい。

注

(1)

本稿で取り上げる擬古文物語四編のほか和歌・琉歌歌人としても知られ、組踊『手水の縁』の作者であるともされている。

(2)

たとえば、擬古文物語の一編『若草物語』に与えた『伊勢物語』の影響については、すでに拙稿『平敷屋朝敏の擬古文物語「若草物語」の生成とその注釈について』(国文学研究資料館『平成20年度研究報告 物語の生成と受容④』、二〇〇九年三月)において詳述した。

(3)

『沖繩文学に及ぼした平安朝文学』(岡一男編『平安朝文学事典』東京堂出版、一九七二年五月)↓のちに『琉球文学論』(沖縄タイムス社、一九七六年)に収められた。

(4)

『若草物語』『苔の下』『萬歳』試論』(法政大学大学院『日本文学論叢』二三号、一九九四年三月)

(5)

『琉球の和文学と漢文学／和文学』(岩波講座日本文学史 第15巻『琉球文学、沖繩の文学』岩波書店、一九九六年五月)

(6)

『朝敏の和文世界』(『国文学解釈と鑑賞』七〇巻一〇号、二〇〇六年一〇月)

(7)

朝敏の擬古文物語の注釈書としては、玉栄清良『殉教の文学 平敷屋朝敏の小説』(私家版、一九八四年)と仲原裕『平敷屋朝敏作品集』(私家版、一九九四年)の二冊がある。ともに現代語訳が付され、朝敏の物語を手頃に読めるようにした功績は大であるが、注釈はほぼ語釈の域にとどまっており、本格

的であるとは言えない。

- (8) 同本は朝敏の擬古文物語を「若草物語」「苔の下」「貧家記」「萬歳」の順で収め、その影印本が一九七七年一月と一九七八年一〇月の二回に分けて刊行されている。なお、同本は「萬歳」の末尾一丁分相当を欠いており、その欠脱部分については沖縄県立図書館所蔵「平敷屋朝敏著作物語」により補う。本稿中の「事例D」はこれに該当する。

- (9) 大系と全書に共通する「片時」十一例の内訳は、狭衣と両親との関係において五例、女二宮と両親との関係において四例、若宮と祖母（狭衣母）との関係において一例、式部卿宮姫君と母親との関係において一例である。なお全書だけにある一例は、嵯峨帝と中宮との関係において出てくる。

- (10) ちなみに『源氏物語』大島本で「片時」は十三例（ほかに「片時の間」が三例）認められ、それらは親子関係の用例に限らない。『狭衣物語』における用例が相対的に多く、その使用に強い傾向があることが見て取れる。

- (11) 当該場面、大系では神殿ではなく「神なり（雷）」が鳴ったとあるが、諸本の状況から採るべきではないと判断される。ただし「頭の髪逆さまになる」描写については、大系でもほぼ同様の記述がある。

- (12) 「底の水屑」を飛鳥井女君の呼称とする意識は、狭衣がくだんの扇を見るより早く、「道季が思ひ寄りしこと（＝道成の弟である道季が、兄が西国に伴った女性こそ飛鳥井女君ではないか）かと思ひついて狭衣に説明したこと」の後、底の水屑まで

- も尋ねまほしき御心絶えず」（大系・一四二頁）と物語の語りのレベルで定着していた。また、飛鳥井自身が自らを「人は底の水屑とこそ聞かない給はめ」（同・四五九頁）と顧み、その空しさを絵日記に書き付けていたという後日談もある。

- (13) 極めて複雑な様相を見せる『狭衣物語』の伝本間の異同においても、特に飛鳥井女君に関連する部分にそれが激しい。また、『狭衣物語』を原作として室町時代に成立する公家物語御伽草子および奈良絵本は、飛鳥井女君をヒロインとしており他の女性を登場させない。これらのことから、狭衣と複数の女性たちとの関わりを描いて複線的に展開する『狭衣物語』ではあるが、享受者たちの嗜好・興味が飛鳥井女君譚に大きく傾いていたことは疑えない。

- (14) 注(7)参照。
(15) この貫之歌については『狭衣物語』の当該例を除いては、『源氏物語』などの中古王朝物語において引歌に用いられた例をみない。

- (16) ここでは詳述しないが、言うまでもなく『萬歳』の「さのわたりの雪」は、『万葉集』に載る「苦毛 零来雨可 神之埼 狭野乃渡尔 家裳不有国」（巻三・二六五・長忌寸奥麻呂）を本歌取りした藤原定家の「こまとめて袖うちらはらふかげもなしさのわたりの雪の夕暮」（『新古今和歌集』巻六・冬・六七一、『正治初度百首』一三七〇、『拾遺愚草』九六七など）に拠る表現である。ただし定家詠に先んじて『源氏物語』東屋巻で、薫が「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさ

(17)

びて」(新全集⑥九一頁)簀子に腰を下ろしているという場面がある。

ただし、左に示すように、『源氏物語』須磨巻における光源氏と花散里との別離の場面にも伊勢の当該歌が引かれており、ここにおいて伊勢歌の「月」から「月影」への変換が見られる。『狭衣物語』が「濡るる顔」を引用するにあたっては、伊勢歌とともに『源氏物語』も意識されていた可能性が高い。

例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あはれなり。
女君の濃き御衣に映りて、げに濡るる顔なれば、

月影のやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光
を
(新全集②一七五頁)

(18)

朝敏の擬古文物語のうち『若草物語』『萬歳』の注釈については、拙著『研究報告』平敷屋朝敏の擬古文物語群に関する基礎的研究——近世琉球に現れたヤマトの古典文学——(私家版、二〇〇九年三月)で試みている。そこで指摘したことは本稿の内容とも重なっているが、このたび本稿をなすにあたって考察を深めた箇所や知見を新たにした箇所が少なからずある。

なお、朝敏の物語の「注釈」について付言すれば、注(7)で触れたように先行注釈では足りないところが多く、注釈の精度を高めることにより、「読める」ようになる箇所が少なからずある。たとえば、白太郎金に惹かれるようになった真鍋樽金が、自分が許婚ある身であることを悔いる場面に、

「さ早く定めけん」と、いまさら悔しう、「ものにもがなや」

とさへ思されける。

というものがある。これに対して玉栄注には言及がなく、仲原注は「物」すなわち「非人間」にでもなりたいたい。「死んでしまいたい」と訳しておいた」と解くが、こゝは『源氏物語』ないし『狭衣物語』の表現を学んでのものだということを踏まえれば、難なく解することができる。『源氏物語』には「ものにもがなや」は、女三宮の出家に未練を残す源氏の「取り返すものにもがなや」(柏木巻・新全集④三二二頁)、匂宮に引き取られた中の君に執着する薫の「ものにもがなや」と、かへすがへす独りこたれて(早蕨巻・新全集⑤三六五頁)、匂宮の結婚に苦しむ中の君に執着を深める薫の「過ぎにし方の悔しさを忘るるをりなく、ものにもがなや」とり返さまほしきとほのめかしつつ(宿木巻・新全集⑤四二六頁)と、三例見え、「取り返すことができるものならばそうしたい」の謂いであることは明らかである。『狭衣物語』に一例みえる「ものにもがなや」(全書・下一六八頁、大系・三五八頁では「ものにもが」)も同様である。当該表現は本歌が未詳である『源氏物語』などの古注はこれを「とりかへすものにもがなや世の中をありしなごらの我が身と思はん」の引歌表現と見るが、出典は不明であるが、ともあれこのような王朝物語からの摂取を意識することで、朝敏の物語世界に対する理解は格段に深まるであろう。

付記・本稿は、平成18〜20年度科学研究費補助金(基盤研究C・課

題番号18520121)「平敷屋朝敏の擬古文物語に関する基礎的研究——近世琉球に現れたヤマトの古典文学——」および平成21年度科学研究費補助金(基盤研究C・課題番号21520195)「近世琉球における和文学の研究——擬古文物語の考究および和歌の基礎的研究——」による成果の一部である。

(はぎの あつこ・琉球大学准教授)